

Photo by Igarashi Taro, Layout design by Mise Risa

お人よし主人と敏腕執事コンビが送る皮肉たっぷりコメディ



それゆけ、ジーヴス／P. G. ウッドハウス／森村たまき・訳／国書刊行会／2005年

イギリスの国民的作家・ウッドハウスのユーモア小説。長らく日本では絶版でしたが、国書刊行会から近年、続々と出版中。主人公はのん気でお人よしの英国貴族のパーティ。物語はパーティの個性豊かな（かつ厄介な）友人たちが持ち込んでくる事件を、彼の執事・ジーヴスが鮮やかに解決するという決まったスタイル。くだらない事件に真剣に挑むも大抵裏目に出るパーティと、そんな主人のことを頭が悪い、嫉しなくてはいけないと切実に思っているジーヴスのコンビが絶妙！

クスッと笑える、皮肉っぽいジョークが好きな方におすすめ。

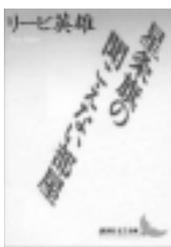
なぜ殺人は予告どおりに行われたのか？



予告された殺人の記録／G. ガルシア＝マルケス／野谷文昭・訳／新潮文庫／1997年

1950年代のコロンビアで、実際に作者の親族の身に起こった事件を基にした中編。町をあげての婚礼騒ぎの翌朝、ある男が遺体で発見される。男を殺害した犯人は、充分すぎるほど殺害を予告して回っていたにもかかわらず、村人の思い込みや不見識といった偶然が重なって、殺人が防がれることはなかった。共同体のメカニズム、因習、妬みや怒り、人間関係が重層的に絡み合い物語は進行してゆく。フィクションを交えてはいるものの、基本的には淡々とした「記録」。事実こそがもっとも不条理なのかもしれないと思わせてくれる。

自分のことがいちばん、分からない



星条旗の聞こえない部屋／リービ英雄／講談社／2004年

アメリカ外交官の息子として、横浜の領事館で暮らすベン・アイザック。日本人をどこかで見下している父、「アメリカ人」としてしか自分を見ない日本人の両方に反発した彼は、「人間」として居られる場所を求めてさすらってゆく。著者はアメリカ生まれ。『日本語を母語としない著者による、初の日本語の小説』であり、表題作の主人公は、著者の分身と言える。日本人とは何か、アメリカ人とは何か、そして自分は何か。曖昧な中をさ迷う主人公の姿は決して特別ではない。国を出すと大仰だが、自己のアイデンティティとは誰もが持ちうる普遍的な問題なのだろう。

角を曲がれば広がる、迷路のような日常への招待



日本の路地裏100／佐藤秀明／ピエブックス／2005年

日本全国の路地裏を集めた写真集。軒先に下がったままの洗濯物。今にも小学生が飛び出してきたような十字路。どこからかカレーの匂いが漂ってきそうな家並み。そんなノスタルジーを喚起させてくれる風景がある。

黒檀色の建物と雪道、石垣と眩しいルビー色の花、ネオンサインと闇色の道など、美しい色の対比に彩られた写真も魅力的。この角を曲がった先に広がるのはどんな世界か、とほのかな期待を抱かせる路地裏には、日常と非日常が背中合わせに同居しているのかもしれない。

Books

アリスが迷い込んだのは、美しい悪夢の世界



ALICE/ヤン・シュヴァンクマイエル監督/スイス・西ドイツ・イギリス/1987年製作/84分
ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』をベースに、チェコの名アニメ作家が挑んだ初長編作品。

アニメーションと実写が混ざり合った映像世界は、美しくて幻想的でグロテスク。色鮮やかでわくわくするファンタジーとは一味違い、全編ほこりっぽいような、薄汚れた色彩がどこか怪しげで、夢の中を漂っているよう。小さい子にはちょっと不気味すぎるけれど、ウィットに富んだ映像は、不思議な中毒性にあふれている。原作の『アリス』が持つ、ファンタジーの不条理さがより強く表現された、大人向けアニメーション。

幼くして人生に刺まれた、まだ終わらない悲劇



アフガン零年/セディク・バルマク監督/アフガニスタン・日本・アイルランド/2003年製作/82分
舞台はタリバン政権下のアフガニスタン。女性だけの就労や外出が出来ない社会の中で、父親を内戦で失った少女は髪の毛を切り、家族を養うため少年と偽って働き始める……。

タリバン政権崩壊後のアフガニスタン映画・第一作とも呼べるべき作品。物語ははっきり言って救いがない。それは「アフガニスタンの悲劇はまだ終わっていない。希望を描けば嘘になる」という監督の思いに囚る。俳優ではなく、一般の人々から選ばれている出演者たちの視線が、ずしりと重い。希望を描くことさえもフィクションに変えてしまう戦争の現実。深い哀しみが描かれている。

北欧の台所の片隅から生まれる、ちょっとおかしな友情



キッチン・ストーリー/ベント・ハーメル監督/ノルウェー・スウェーデン/2003年製作/91分
1950年、スウェーデンの家庭研究所で、ノルウェーの独身男性の台所での行動パターン調査を行うことになった。調査員のフォルケは、老年の独身男性イザック宅へ。調査対象とは決して話をしてはいけないという規則であったが、ふたりはいつしかゆっくりと交流を温めていく――。

物語は特に大きな起伏があるわけでもなく、淡々と進行してゆく中にじわりと面白さが染み出てくる(眠い時の視聴はおすすめできないけど)。たまにはハリウッド映画以外も、という時に。北欧のインテリアが好きな方にもおすすめ。寒い日に、こたつで見たい作品。

青春はうさんくさくもアツい



バス男/ジャレッド・ヘス監督/アメリカ/2004年製作/95分

ナポレオン・ダイナマイト(フザけた名前)はアイダ木の片田舎で暮らすさえない高校生。モテたいがためとはいえ、勝算ゼロの生徒会長選に立候補した唯一の友達・ベドロを、彼は懸命に応援し始めるのだが…。出てくるキャラがとにかく濃ゆくてうさんくさく、B級の臭いぶんぶん。加えて独特のテンポと温度やや低めなノリがツボにハマる。邦題が先入観を与えますが、「電車男」と酷似した点は一切ない、青春映画(ついでに言えばバスもあまり関係ない)。ぜひ友達同士でナポレオンのTシャツプリントにツッコみながらどうぞ(何を思ってアレを買うのか……)。

(担当 17生 見世 梨沙)

Films